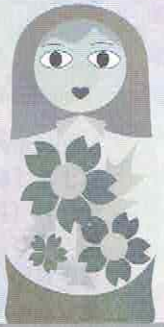




プリローダ

第59号
(NPO 第12号)



【ПРИРОДА】プリローダ=ロシア語で“自然”という意味をあらわす

発行：2015年1月1日

むさしの・多摩・ハバロフスク協会は、東京都武蔵野市で生まれた、「寒帯林保全」、「自然体験活動」、「国際交流」などを行う NPO 法人です。

ハバロフスクとの交流展を実施します!!

2015年植林ボランティアツアーinハバロフスク（別途チラシ参照）は、来年の5月3日（日）～10日（日）の予定で実施致しますが、その募集期間中に、植林のこれまでの経緯を振り返り、ハバロフスクとの交流を広く皆さんにお知らせする展示会を行います。

この間に植林参加希望者の説明会も同場所で実施します。ご希望の時間に、個別にゆっくり時間をとって行う予定です。

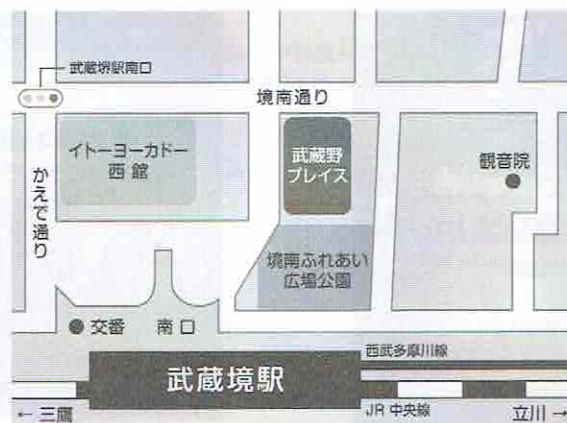
会場には、植林や緑の少年団の事業の様子の写真や環境ポスター、ロシアの関係者から頂いた動・植物写真集などの書物や調度品の展示も行いますので、ご興味のある方は、ぜひご来場下さい。

場 所：武蔵野プレイス1階ギャラリー（武蔵境駅南口）

日 程：2015年1月5日（月）11時から7日（水）17時までの三日間



ハバロフスクのシンボルである
アムールトラの飾り皿



武蔵野プレイスの開館時間 9:30～22:00



琥珀をちりばめた小物入れ

お知らせとお詫び

前回のプリローダ58号で支援のご寄付をお願いしたくハバロフスクの太平洋国立大学の学生の研修が、実施直前で中止になりました。日本におけるすべての準備は整い、あとは来日を待つばかりとなっておりましたが、学部長より直接お詫びのお手紙を頂き、本年度は中止となりました。

詳しい理由は不明ですが、来年度は是非実施したいとのことですので、ご寄付を頂いた皆さまには、来年まで協会でお預かりをさせていただくことのご了解をお願いしました。

皆さまからのご厚志に心から感謝を申し上げますとともに、お詫びを申し上げます。

若者の活躍に感謝！

第4回緑の少年団国際交流inJAPAN

2011年の夏から始まった公益社団法人国土緑化推進機構主催による「緑の少年団国際交流」ですが、本年は8月4日（日）～10日（日）にかけて、福島県西郷村の国立那須甲子青少年自然の家などを実施会場として行われた。ハバロフスク地方の環境学習団体に所属する11～15歳のロシアの子どもたち15名が来日し、山形県・栃木県・神奈川県・大阪府の緑の少年団に所属する7～15歳の日本の子どもたち18名と友好を深めた。

当協会は、この交流のコーディネートを2010年の準備段階から行っている。国際交流の参加相手国を探していた国土緑化推進機構「全国緑の少年団連盟」の依頼を受けて、植林ボランティアツアーでお世話になっていたハバロフスク市役所国際交流センターのチェルニコワ所長（当時）にお願いして、ハバロフスク地方政府森林管理局のボルトルシコ局長を紹介していただき、現在の交流が始まったのである。

隔年で両国を訪問しており、本年は日本における2回目の実施となったが、前回アルバイトでお手伝いをしてくれた東京外語大の学生を中心とした若者たちが本年も大活躍してくれた。

直前になって地元の西郷村の子どもたちも参加することになり、多人数になったにも関わらず、グループリーダーとしてし

っかり面倒をみてくれた。プログラムのひとつのイワナつかみ後の塩焼で、煙まみれになって火を管理してくれた若者は、武蔵野ジャンボリーの指導者として培った火おこしの技術？！が役に立ったようだ。

交流終了後の帰国前日は、ロシアメンバーの希望で全日ディズニーランドを楽しんだ。この時も植林に参加してくれた20代の若者たちが友人を誘って駆けつけてくれて、ファストパスなどを駆使して時間を有効に利用して多くのアトラクションを楽しむことができた。小学生を含むロシアの子どもたちは、まだまだやんちゃ盛りで順番を守らなかったり、安全管理で注意を受けたりと困った出来事も起きたが、そのつど担当の若者たちがきちんと対応をしてくれて大事に至らなかった。

アクシデントもいくつか起きたが、すべてのプログラムを予定通りこなし、無事帰国をしていただけたことは、毎晩、十分な時間をかけて、反省と以後想定される場面の検討を協会スタッフと共に皆なで相談したことが、功を奏したのではないかと考えている。

準備を含めて、お手伝いをいただいた全てのスタッフの皆さんに、心から感謝を申し上げます。

※緑の少年団とは

昭和35年、国土緑化推進委員会が「グリーン・スカウト」の名称で緑化を実践する少年団の結成を呼びかけ、各地で少年団が誕生。昭和40年代には「緑の少年団」として全国各地で結成され、平成元年には緑の少年団は2000団体、団員も18万人と大きく成長した。そこで「みどりの日」の制定を機に、さらに、少年団活動の内容充実や相互の連携強化を図ることを目的として「全国緑の少年団連盟」が設立された。緑の羽根募金の助成のもと、現在の規模は3536団体、約33万人となっている。



講演会レポート

「12000年前の『岩絵』のナゾ??ロシア古代岩絵の保存と村おこし」

講師：井出晃憲（NPOユーラシアン・クラブ副理事長）
2013年12月15日 共催：宮本三郎記念美術館と地域の会

川辺を散歩していて、ふと目を向けた岩に絵が描いてあったとしても、あなたはそれほど驚かないだろう。しかしその絵が12000年前に描かれたものとしたら…?

ロシア極東のシカチ・アリヤン村では、所々で先住民族が描いたとされる「岩絵」が見つかっている。獣や人、魚などが岩に刻み付けられているが、色が付いていないので気付きにくい。これらの岩絵は一体いつ描かれたのだろうか？講演者の井出晃憲さんによれば、描かれた時期を12000年前（！）とする説もあるそうだ。あのナスカの地上絵でさえ、描かれたのは紀元前200-800年頃と推定されているので、これが本当ならば世界遺

産級の扱いを受けてもおかしくはない。しかしながら、現地はというと岩絵の周りに柵すらなく、そのせいで落書きをされたり、ニセの岩絵を描かれたりとロシア国内外からの観光客によるいたずらが相次いでおり、村おこしと岩絵の保存との間でナナイの人々は悩んでいるのだそうだ。時代が変わり観光資源としての価値を持って、岩絵が先住民族の時代から伝わる説話や生活を保存する重要な史料であることに変わりはない。自然と共にあるナナイの人々の暮らしを記録してきた岩絵、ぜひとも守られてほしいものだ。（寄稿：豊田 宏）



川辺の岩絵



魚?の岩絵



憩いの場になってしまっている現場

「満州（ロシア人開拓村）ロマノフカ村の日々」

講師：中村喜和氏（一橋大学名誉教授） 主催：NPO日口交流協会
2014年11月1日 日本記者クラブ（日本プレスセンタービル9階ホール）

ロマノフカ村は、1930年代にソビエト政府の政策を拒否してロシア沿海州から逃亡した人々が日本占領下の満州に建てた集落の1つである。このロシア人たちはロシア正教の分派である旧教徒（古儀式派）であった。旧教徒は17世紀の教会改革を認めず改革以前からの教会儀礼を保持し続け、迫害を受けながらも自分たちの宗教を守るため、居場所を求めてロシア内外に散らばっていった。彼らが満州への入植をスムーズに進めるのを目にした日本当局（満鉄）は、満蒙開拓の参考にすべくロマノフカ村を研究対象とした。講演会では、中村氏が収集・整理した当

時の研究員らによる貴重な写真のうち約40枚がスクリーンに映し出され、それら一枚一枚をもとに村での暮らしや、被写体となった人々の第二次大戦後の消息が紹介された。戦後、満州国が消滅すると村人の半数、特に成人男子のほとんどはソ連へ連行され、あとの半数はオセアニアや南北アメリカ大陸に再移民していったそうである。村人自身の手で建てられた家々や、農作業、村の祭りなどの様子を写した白黒写真から、激動の時代をつつましくもたくましく生きていた住民たちの生き生きした姿を見ることができた。（寄稿：四津 啓）



ロマノフカ



ロマノフカ村のありか

ロシアの歌の魅力

「仙台ロシア合唱団」 青木郁子

ひとくちに「ロシアの歌」と言いますが、作者や時代、形式などによって細かく分類されるらしいのですが、それはあまりにも広く深い世界で、入り口を定めかねます。が、私がロシアの歌を一つまた一つと知るたびに思うことは、歌の題材の多様なことです。つまり、歌の内容が「ステンカラーズ」など史実を歌ったものや「ウラルのグミの木」など恋を歌ったもの、ロシア特有の「自然や季節・風景描写」「戦争」「労働」「祖国愛」「子守唄」果ては「囚人」「牢獄」の歌まであるのです。しかも、囚人や牢獄を扱った歌のメロディーの美しさといったら！このような歌を生み出した、あるいは生まれたロシアという国にもおのずと興味がわいて来ます。

ところが、ハバロフスクに植林に行き、あちらの学生さんたちと一緒にロシアの歌を歌おうと思えば、「カチューシャ」も「モスクワ郊外の夕べ」も、「え？それ何ですか？」と誰も知らないのには驚きました。時は流れ、歌われる歌も同じように代わっていくのでしょうか。

しかし、私が所属する「仙台ロシア合唱団」では、ロシアの歌なら何でもござれとばかりに、ジャンルを問わず果敢に

(?)歌っております。まだ発足5年の駆け出し合唱団ですが、それゆえに、ロシアの歌に関する発見や魅力を見出すことも多く、「前途洋々」と「前途多難」を合わせ持ちつつ、ロシアの歌を愛唱していきたいと思っております。



アルタイ民族の祭典「エル・オイン」に参加して

橋本秀徳(モンゴルホーミー協会認定プロフェッショナルホーミー歌手、馬頭琴演奏家)

夏の1ヶ月(6月末～7月末)、ロシア連邦アルタイ共和国で二年に一度開かれるアルタイ民族の祭典「エル・オイン」への出場と修行に行ってきました。北京経由でノボシビルスク着後、バスでゴルノ・アルタイスクというルートとなり、アルタイ共和国がメインの滞在になりました。

7月3日～5日、祭典でのホーミーによる英雄叙事詩の大会「クリルタイ」は、夜は氷点下まで気温が下がる過酷な環境下で英雄叙事詩に基づいたホーミー喉歌「カイ」の20分以上通しの演奏が条件でしたので、まさに激闘でした。この「クリルタイ」という名前はチングスハーンの時代の王族たちによる最高政治会議(「大ハーン」の決定や他国への遠征の決定など)に使われていた名前、今のモンゴル語にはない言葉なのですが、かえってチュルク(トルコ)系の言語にこの言葉が残っていて、その名残のある名前の大会に出場させて頂くことには、とても感慨深いものがありました。

静寂で勇ましい顔つきでステージに向かう若者、文化庁の役員とケンカして出演放棄してステージを去る荒くれ者がいたり、最高のパフォーマンスを見せてくれた「アルタイ・カイ」アンサンブルの新メンバーの若者、荒れ狂う天気で降りしきる激しい雨(天気は悪い・寒い、と現地の人たちからも不評な野外の

会場です)。そんな中で現地の人たちを圧倒する勢いで(!)、堂々と演奏して歌いきりまして、受賞もして(想像を絶する過酷な環境があり、様々な「激闘」があり、そんな中で評価を頂き、闘い抜いて「もぎとって」きた、という表現が適切かもしれません。)くることができました。その後は、力を使い果たし、およそ13時間ほど、テントで眠り続けていました。

私と同世代のアルタイ人演奏家たちとも再会でき、私が現役バリバリで、しかも八年前と見違えるほど体格がしっかりして大きくなって、パワーアップした演奏を披露したのを見て、とても喜んでくれました。

帰国後の10月には、ハカス共和国(シベリア南西部)からの招待を受け、喉歌「ハイ」、トプショール、様々な曲目などハカス音楽研修会及び二回のガラ・コンサート出演という内容でとても素晴らしいチャンスを頂き、ハカスの音楽に流れている世界観、バックグラウンド、様々な表現、技術をしっかりと身体に染み込ませておくことができました。このような素晴らしい機会を与えて下さり、歓迎をして下さったハカス共和国の文化庁及び共和国楽団、現地の親しい友人のみならず、関係者のみなさまには感謝の気持ちでいっぱいです。アルグス・ボルズン!(ハカス語の「ありがとう」です。)

プロローダ 第59号

発行日 平成27年1月1日
発行 NPO法人むさしの・多摩・ハバロフスク協会
住所 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-15-25
TEL/FAX 0422-23-5351
E-mail mail@mtxa.org
URL http://mtxa.org/
発行人 安藤 栄美
編集 田崎 桂子
広報委員 依田和也、北爪達也、永田秀樹、木崎 剛、落合 恒、内田 央、内田 周
印刷 巧芸印刷(株)

編集後記

今回は、多くの方々からのご寄稿を頂きました。これからも、さまざまな情報をお届けできればと考えておりますので、ロシアに関する素敵な出来事がありましたら、ぜひお知らせ下さい。

